

愛知・緑支部は、班や小組で高井ツタエさんの被爆体験を聞く会を開いています。被爆者であることを隠して生きてきた高井さんが、被爆体験を語るようになったのは東日本大震災が起きてからのことです。

親子で地獄を見て

私は、長崎市戸町(爆心地より5・4キロ)で9歳の時被爆しました。あの日から70年、今まで戦争も被爆も忘れない、忘れようと努め、被爆者であることを隠して生きてきた私でした。しかし東日本大震災で家も人も田畑ものみこんでいく津波の光景が、長崎で迫ってきた火と煙の記憶を呼び覚ました。そして原発事故…体の震えが止ま

〈20〉 福島のためにもがんばりぬく

名古屋市長古屋市 高井ツタエさん(80)に聞く

りませんでした。

◇ ◇

1945年8月9日午前11時2分、姉は七輪で豆を煎り、わら草履を編む母のそばでは赤ん坊の弟が眠り、私と弟妹たちは土間で遊んでいました。突然稲妻のような目のくらむ白い光が走り、すごい音と台風のような灰色の風に壁は飛び散り、窓ガラスは割れ、ラジオやタンスが空中を飛びました。

その後、防空壕へ行くと言防団の人が「浦上の方に大型爆弾が落とされた」と。父は浦上の親せきや知人の安否を確かめに行くと言います。私も幼友達で浦上の城山町へ引っ越したチツちゃんのことや心配になり、「父ちゃん、私も連れて行って」と姉と3人で出かけました。浦上の方を見上げると黒い煙と、きのこのような形をした雲が上

がっていました。

浦上が近づくにつれて煙が流れてきて、倒れている人、戸板に寄せられていく人でいっぱいです。岩川町は？ 城山町は？ と聞いても「こがん火と煙の中わからん。子ども連れでは行けません。死ぬよ」と言われまし

た。真っ黒になった人、「水ば、水ば」と探す人に「どうすることもできません。堪忍してくれ」と父も泣いていました。

夜遅く家につくと父も姉も頭が痛い、吐き気がすると言って寝てしまいました。私はひどい下痢でした。父は翌朝また探しに出かけました。

被爆者への差別

戦後、父は身体を壊し

働けなくなりまし
た。私は
中学卒業
後働きま
したが、
被爆者と
わかると
「病気が
うつる」
と職場を
追われま
した。
魚の干
物会社で
います。

封印してきた長崎での被爆体験を語る高井さん



私たちの苦しみ、自身のせいではないことをはっきりさせたい。福島の方がたにもつながることだと思ひ、がんばっています。